

同窓会設立50周年記念行事 同窓生のためのスタディツアー 報告

河見誠先生と行く カンボジア スタディツアーに参加して

〈2025年2月25日～3月3日〉

46H 小谷真喜子（新井）

カンボジアスタディツアーは、同窓生5人と河見誠先生と趙慶姫先生の7人での旅でした。

シェムリアップで私たちを迎えてくれたのは赤ちゃん連れのNPO法人 GLOBE JUNGLEの酒井恵理子さんで、これからの旅の案内人でした。まず酒井さんが支援しカゴバック等を製作し、フェアトレードで販売している工房を訪れました。現地の女性がいきいきと働いていました。



フェアトレード工房にて

続いて現地の小学校を訪問しました。授業は午前と午後の二部制で、教室には電気がなく薄暗い中でも、子どもたちの元気な笑顔がまぶしく感じられました。



翌日は朝日に照らされたアンコールワットや沢山の遺跡群を見学。これほど壮大な遺跡が長く森に眠っていたことに驚かされました。

この町で校友が起業し視覚障がい者を雇用するマッサージサロンを訪問。現地の視覚障がいの方からお話を伺い施術してもらいました。



村の小学校「ココナッツスクール」

その後、首都プノンペンに移動し、GLOBE JUNGLEが運営するくっくま孤児院を訪ねました。さらに車で3時間ほどの村に移動して学校見学し日本語授業に参加し、敷地内の高床式の施設に宿泊しました。そこで、しばらく学校を休んでいる児童の家を訪ねたところ、祖母と二人でその日の食事もないという状況を知りました。両親は出稼ぎに出たまま、事故にあい仕送りも途絶えているとのこと。迷いながらも、今夜の米と食料を届けました。

この旅で、貧困や出稼ぎ、戦争の影響を肌で感じ、日本の生活では想像しにくい現実を知りました。また、現地で支援活動に取り組む若い日本人女性たちの姿に心を打たれました。現地で共に暮らしながら課題を解決しようとするその力強さとしなやかに、自分にできることは何かを深く考えさせられる旅となりました。

輪島達郎先生と行く 沖縄 スタディツアーに参加して

〈2025年2月20日～23日〉

44J 田房 道子

7割の基地負担をさせられ続けている沖縄にずっと申し訳ない気持ちで一杯でしたが、沖縄スタディツアーを会報で発見！参加同窓生は50代から70代の計8名。輪島先生のおかげで個人旅行では知りえない沢山の初めての見て、聴いて、食べての有意義な体験でした。

辺野古基地埋め立て現場は白い砂浜、曇った空、返す波、アダンの実があるのみ。オール沖縄会議闘争部のテントには「勝つ方法はあきらめないこと」という大きな幕が冷たい風の中にあり、人影は全くなく、さぞ無念だろうなと思いました。

平和の礎にある平和祈念資料館の2階の大きな窓から広い海原を見渡して「ここがカフェだと良いのに」と言っていました。そこは大勢の住民が追い詰められ崖から飛び降りた摩文仁の丘だと伺いました。知らないということは残酷です。

読谷村では、2つのガマ（自然壕）を見学。チビチリガマは「米兵は鬼畜」と教えられ住民が集団自決に追いやられたのに対し、シムクガマではハワイからの帰国者が「アメリカ人は人を殺さない」と住民を説得し投降、1000人が生存。



シムクガマ

佐喜真美術館では館長の佐喜真道夫氏に「沖縄戦の図」の前で解説していただきました。館長著『アートで平和をつくる』によると、美術館を作るための普天間基地内の土地返還要請は何年も進展なし。「長期間邪魔し、屈服させようとしていたのは米軍ではなく日本政府の方だった」とか。

私の疑問、虐げられ続ける沖縄をどうしたらいいのか？どうやって戦争を語り継ぐか？ 答えは、語



佐喜真美術館にて

り継ぐために佐喜真氏やひめゆり平和祈念館の様にその場所を作り、何が本当かを知り、伝えていくこと、それを応援することではないか？

最後に参加者と沖縄に対する痛みを共感でき本当にうれしかったです。貴重な機会を与えてくださった輪島先生と同窓会に心より感謝いたします。